

瓜生山でこどもが笑う

鍋 島 恵 美

(認可保育園 こども芸術大学)

瓜生山は、白川通りから一乗寺下り松の東奥に見える恰幅のいい小高い山として知られている。その山に抱かれ一角を庭に暮らしている保育園が、私の居場所である。園舎は瓜生山を東に、西は愛宕山を望む西山連峰とともに市街が一望でき、北は、京都五山の送り火として知られる「船形」「妙法」「鳥居」が見渡せ、自然に溶け込むように建てられている。その風景を借景にするがごとく設計された窓や出入り口は、すべて透明のガラス張りである。東側の窓は絶妙である。というのは、窓枠は額縁を思わせるようなデザインになっており、そこから室内に差し込む自然光や木立の揺らぎに出会うと、ことのほか心が舞い躍る。この山に抱かれていると、四季折々の風や香や彩に心が研ぎ澄まされていく。いったい、この環境の中で暮らすこどもたちは、どのようなことを感じとるのであるか。静かに、四季を通して瓜生山とともに、こどもの情景を見つめ想いを語ってみようと思う。

春 であう・なれる季節

春の瓜生山は大地の芽吹きとともに生き物が目覚める時を刻んでいる。こどももその時を感じながらも、初めての場所で初めて出会う社会生活には、複雑極まりないようである。その不安・恐怖・悲しみ・怒りといった気持ちが、「泣く」「かたまる」「うごく」「なげる」といった姿に表現されてくる。実力行使の姿もある。1歳児のアイちゃんは、泣きながらお母さんが朝に持ち物を置いた順を逆に、つかまり立ちをして精いっぱい背を伸ばし、ロッカーの一番上の荷物から取っていかこうとする。お母さんのすることをよく見て感じとっていることに驚く。とともに、一刻もここから早く脱出して、お母さんのもとに帰りたいのだろう。その思いがひしひしと伝わってくる。そのような姿を見るとこどもの一心不乱の懸命さに、愛おしく抱きしめてやりたい気持ちにかられる。私が手を差し伸べようとすると、担任保育者から「この子が、この環境に慣れるのに、今、手を貸さないでください」と言われる。その言葉に、慌てて手を引っ込め、保育者の願いを聞き入

れるものの、私の心は複雑である。こどもが親から保育者へと信頼を寄せていくには時が必要である。

この子らの姿から、今まで家族の中で愛情をいっぱい受け、「いい気持ち」を味わって安心して過ごしていることが伝わってくる。泣く子は、一人ではない。お母さんとは違う保育者は、泣く子のひとりを抱え、もうひとりの子に「嫌なのね」「悲しいね」と「嫌な気持ち」を言葉にして、泣く子の心を受けとめ、背をさすり抱き寄せる。私に厳しい言葉をかける保育者も必死なのである。こどもは、保育者とのそうした時を重ねつつ「嫌な気持ち」の抱え方を学んでいく。と同時に、保育者もひとり一人のこどもと心を通わせ信頼関係を紡いでいく。

入園からひと月が経とうとするころ、瓜生山の木々の新緑がまぶしく目に飛び込んできく。こどもの生活リズムも少しずつ整ってきているように感じる。泣くことが少なくなってきた1歳児は、散歩車に乗って出かけることも心地よくなっている。集団の生活に慣れ始めてきたのであろう。慣れ

るとは、自分自身の適応能力の広がりとともに築かれていくのであろうが、慣らされるものであってはいけない。あくまで生活の主体はこどもである。その子らに「いってらっしゃーい」と手を振ると、「いってきまーす」と保育者の言動に合わせて、手を振って応える。その阿吽の呼吸は、風になびく葉の揺れのようなものである。車の乗り降りも、車体のスロープを使って、自分でよちよちと乗り込み、降りるには、後ろ向きに這って何とか降りてくる。自分の力があるだけ使って、なんという一生懸命さであろうか。自らしようとする気持ちや力が、ジンジンと伝わる。その気持ちを受けて保育者も、こどものやる気が十分に発揮できるように励まし育てていく。

2歳児は、山にも出かけ始めている。山へとこどもの興味をそそる格好のものがある。それは、庭の山の斜面に沿って置かれた一本のころ良い太さと長さの竹である。言うまでもない、瓜生山生まれである。こどもと竹との出会い方を見つめていると、斜面を登る一つの道具や遊具になっている。ノンちゃんは、それを手すり代わりにして歩みを進めていく。ヨウちゃんは、またいで両手を添えて上っていく。ダイちゃんは、まるで馬の鞍にでも乗るようにまたいで、ドンドンと上がっていく。ひとりがそうすると、真似て次々と連なってドンドンどんどん上っていく。面白いからやるものの、少し怖いのか顔は真剣そのものである。こどもの動きに竹が呼応するようにしなる。このしなりで生じる体を感じる振動に共振するが、それがたまらなく愉快なリズムでもあり、凄みでもあるのだろうか。上り終えて山道について立ちあがったとき、ふうーと両肩から力が抜けたかと思うと、ケラケラと笑いはいしゃぐ。こうしたひとり一人の斜面登りをじっくりと後から見守りながら、保育者も歩みを進めていく。

山に入ると、「あっ」、こどもがそのものに引き寄せられるように足を止め見つめるものに出会う。丸型の薄い陶器の顔・顔・顔。斜面に無造作に置かれている。その上を枯葉がかぶさり、顔が見え隠れする。おまけに、薄暗い木立の中の一角にそれらの顔が見つめる。かつての学生の作品であろうか。処分されたのか処分するには惜しくてここに置いたのかと思いめぐらせているときに、3歳児カズちゃんは、果敢に拾った枝で落ち葉を払いその顔を見ようとす。そばにいる保育者が、「おおー なんだろう 何が出てくるのかなあ…」と、おどろおどろしく語りかける。と、もう一人のアッチちゃんは、怖そうに保育者の陰に隠れつつも顔だけは、カズちゃんの手元に向けて「なんやろなあ」と不安げに同調する。「ああ こわー」と言葉を残して次なる道へと保育者とこどもが進んでいく。

瓜生山は、いろんなものを抱かえてこどもやおとなの心をざわつかせてくれる。さらに、こども心をざわつかせる仕掛けがある。4歳児ともなると瓜生山探検隊の進むべき道は、その時に決まるようだ。岐路につくとき「こっちはいや。あっちがいい」「あっちはいや。こっちはいい」と、言い合う。その言い合いの成り行きを見守りつつ保育者が、「じゃあ ここはゴウちゃんのいう道で、今度はモモちゃんのいう道にしたら」となかに入ると、「ほな こっち行くよ」と、笑顔のゴウちゃんの後を、モモちゃんも、次に期待をもって「こっちの道」に進んで行った。

「じゃあ」という言葉は、何かの岐路に立つときに、次を促す言葉であり、こどもなりに考えを巡らせ、一つの提案を導くのである。耳を澄ませていると、保育者も次の活動へと転換したいときによく使っていることがわかる。瓜生山は、自然とともに

こどもやおとなにいろんな力を育ててくれる。

夏 こころとからだをひらく季節

瓜生山の夏の知らせは、セミの鳴き声で始まる。カブトムシやクワガタもコソコソと見え隠れする。生き物の命にふれ命を育む季節の到来である。風で舞い落ちた葉が積もり腐葉土になっている下には、カブトムシやクワガタが潜んでいる。近年は、ペットショップで購入されることが多いが、ここには彼らが生息している。

こどもらの山へ探検に行く目的が、虫探しになっていく。運よくカブトムシを見つけて捕まえてくると、保育室で飼育ケースに入れて飼うことになる。虫好きのヨウちゃんは、さっそく餌がいるからと、次の日にはペットショップにあるカップに入ったジェリーを持ってきた。毎日、餌のなくなり具合を見ては、新しいものに取り換え、土もペットショップで購入したカブトムシ用の腐葉土と入れ替え世話をし始めた。飼育を始めた途端に、人工的になってくる。ある日、保育者が昨晚食べた小玉スイカを利用して、スイカの虫かごが、こどもと一緒に作られた。その中がカブトムシの住処になった。飼育ケースそのものが餌になるのだ。面白いなあと眺めていると、ヨウちゃんが飛んできて「カブトムシに、虫が湧くからあかん」と言う。その保育者は何と云うのだろうかと思っていると、「そうか。でもおいしいスイカの蜜が、いっぱい吸えるしなあ…今日一日だけ、ここにいてもらおうわ。返す時に、よく虫が体についてないか観てみるね」と話されると、ヨウちゃんも納得したのか、そのままもとに帰っていった。さてさて、主人公のカブトムシはなんと感じているのであうか。ただ、その保育者が、カブトムシを今いる自分たちと同じように擬人化して「いてもらおうわ」とこ

どもに伝えた言葉から、生き物を慈しむ心が透けて見えた。

一方、夏と言えば水遊びが始まる。こころと体が開放されるときを迎える。乳児は、モミジやサザンカの樹木がそびえる園庭テラスに仮設プールを置いて遊ぶ。木立からこぼれる陽の光を浴びて、こどもの歓声に負けずとセミの鳴き声が響く。一緒に遊んでいた保育者が思わず「みんな幸せやなあ…セミの声を聴きながらプール遊びができるなんて」と、こどもたちに独り言のように語りかけているのを耳にした。その言葉に「ほんとうにそうね」と私も頷いた。自然のなかで聴こえる音に、無意識に耳がとまり、言葉にしてこどもの耳に届けてくれる保育者の感性が響いた。こどもらは、おとなが感じる気づきを耳に目にしてこそ、こころを揺るがせ感性を紡いでいく。

一方で、山は幸せなことばかりではなく、この子らに怖くて恐ろしいことも起こす。

稲妻が走る夕刻のことである。すさまじい雨音とピカッと鋭く光る稲妻。テラスにおかれたバケツに、みるみるうちに降りしきる雨水がたまっていく。雨音と稲妻の光とが体に響いてくる。この自然がなす恐ろしさに体を寄せ合い、こどもとともに見つめていると、ヨウちゃんが「なんで雲は、落ちないんだろう」とつぶやいた。その言葉を耳にして一瞬、ぽかんと間が空いた。まさかのつぶやきだった。おとなの私は、その不思議さを今の今まで感じることはなかった。発想の新奇さに驚きつつ「なんでやろう」と感心していると、そこにノブちゃんが「だって、糸があるやんか」と応えた。「くも」と発せられた言葉の響きから、「雲」と「蜘蛛」を取り違えた瞬間だ。「蜘蛛と違う」と反論するかと思いきや、そう言われたヨウちゃんは、何も言うことはなかった。言葉の音だけを聞いて、イメージのずれを感じとれなかったのであうか。

しかし、この言葉のやり取りは、漫才の落ちとでもいうか、愉快でたまらなく私の心を幸せにしてくれた。

こどもの想像はおとなを超え、そこから新たな想像が生まれ、表現へと広がる創造的な営みの可能性があることに気づかされる。だからこそ、私たち保育者は、こども一人ひとりのイメージの違いを尊重し受け止めはするが、先取りして教え訂正してはならない。

秋 挑む季節

瓜生山から涼しい風が流れ、空を見上げれば羊雲が出てくると秋の到来である。その季節を感じ、体を使って挑戦する遊びが、庭や近郊の公園でうまれてくる。平地が広がる公園で、小さなコーンを円形に並べて、直径 15cm ぐらいのリングを手に 3,4 歳児のリレー遊び。初めて、そのリングを手にした 3 歳児は、日ごろから遊んでいる車のハンドルに見えたのか、両手でリングをハンドルに見立てて走り出す。そのハンドルを受けとった 4 歳児も、はじめは、ハンドルにして握ったものの、走るには不具合と気づき、片手に持ち替えて疾走する。「かわいかったですよ」と、そのこどもの姿に目を細める先生たち。「バトンとはこう持って走るもの」と決め付けないで、こどものイメージの表現をあるがままに受けとめ、そこから創造的な遊びに繋がる日々を、先生たちが紡いでいる。肌にひんやりした風が流れ、木々の紅葉が空に近いところから始まる。日に日に瓜生山の彩が深く変化してくると冬の訪れが近い。

こどもは風の子とはよく言ったものである。東の山の庭で、夕方の保育が始まる。3、4 歳児が先生と鬼ごっこを始めた。この頃になると、斜面であるにもかかわらず、身のこなしがしなやかである。よく見

ていると、自分の力量にあった所を上り下りしていることに気付く。この庭で繰り返し遊び挑む中で、庭の斜面の勾配やでこぼこさやすべり加減を、体を通して感覚的につかんでいるのだろう。木立や背丈のある草の中に隠れて「もういいかい」「まーだだよ」「もういいかい」「もういいよ」と言葉が返ったと思うが早いか、キャーと走り出す。山に響くこどもの声と、動きが交錯する夕暮れ時、西山に沈んでいく夕日の光が、こどもらが遊んでいる東側の庭の斜面を照らす。そこで展開される遊びは目映く格別である。その庭が、夕日が落ちるのと同時にだんだん闇に隠れていく。すると、「暗くなってきたし、また明日ね」と遊びの終わりを告げる先生の言葉がこだまする。その言葉を聞いてこどもは、サーと山の斜面を駆け下り遊び終えて保育室へ戻っていく。先生が「暗くなってきたから」と呼びかける感覚的な言葉と、それに応えるこどもの体の動き（反応）に心がとまる。暗いから見えなくなってきたからおしまいにしようという自然とともにある時の豊かさがここにある。

冬 つながる季節

師走の頃、お正月を前にガラス磨きや鏡餅飾りが、土曜保育のこどもと一緒に始まる。硝子戸の内側は 1 歳児と 2 歳児で、外側は、テラスに出て 3 歳児と 4 歳児が活躍する。二階テラスに枝を張り出す柿の木から、柿を採って干し柿を作り、ウラジロは山で見つけて採ってくる。それらを鏡餅に飾る。日々の暮らしの中で、瓜生山も気持ちよく新しい年を迎える。

和室に飾られていた鏡餅が、保育者とこどもがアルコールで毎日拭いてくれたおかげで、カビが生えることもなく鏡開きを迎える。鏡餅の中にいる神様に、無事お山に帰っていただこうと、こどもひとり一人が

木槌を振り、やっとのことでひびが入り「神様 出ていったかなあ」と、山を見つめて見送る。節分には、山から鬼が出で来るその日に大豆を食べて厄払いをし、鬼が嫌うイワシを、山で採ったヒイラギに刺して玄関に飾る。瓜生山は、日本の伝統行事に必要な植物も育み、行事に登場する鬼や外国からの魔女やサンタクロースと、グローバルに招きこどもの夢を壊さない包容力を秘めている。

寒くなってきたその山に、毎日せっせと出かける3歳児。いったいどこで遊んでいるのだろうと、興味津々山に入っていくと、“ビューン シャリシャリシャリ”という音がしてくる。耳に届く不思議な音に導かれ、その先をたどっていくと、探していた3歳児のおうちに着いた。毎日毎日、その場所まで出かけて行っては、木の枝を拾って、先生と一緒に立てかけては結び、家の外壁らしきものが造られていく。あの不思議な音は、枝と枝を結ぶスズランテープに強い風が吹いて奏でられる音だ。保育室での電車遊びが、その家から出発する斜面のくだりに沿って、枝を使って線路を組み立てる遊びに発展している。家の中には、トイレが造られ、玄関のドアや呼び鈴が、落ち葉や枝を使って造られていく。家の中の中央に、火をおこす場ができ、バ

ーベキューが始まる。落ちているゴルフボールが卵や肉に見立てられる。線路を長くつなぎ電車遊びをすることも、バーベキューに興じることも、玄関の出入り口を掃除することも、山の斜面を遊園地に見立てて滑って遊ぶこともと、造られていく家を中心に、山にあるものを遊びの道具として取り入れている。ひとり一人が思い描くイメージが形作られつつ共有されていく。保育者は、こどもの力ではできないことに力と知恵を貸し、保育者もその中の一人として遊びを楽しんでいる。自然の時間の中で、ゆっくりとこどもの時間が流れていくのをまじまじと感じさせられる。

一方、4歳児は何やら企みがあるらしい。山から帰ってくるとすぐにヨウちゃんが、「“ここから みちはありません” って書いて」と頼んできた。言われるままに書き進め「何が始まるの?」と聞くと、「ないしょ」と言いニヤリとする。しかし、どうもその文面からすると、その先にあるものに気づかれないようにする作戦であろうか。彼らは、木立ちに囲われた一角に、長くて丈夫な枝を山のように組んで「秘密基地」を造り、見晴らし台まで登る梯子に枝を組み、冒険を楽しみ始めている。

(本文中のこどもの名前は仮名である)

おわりに

瓜生山の四季とともに、こどもと保育者が織りなす風景を思うがまま描いてきた。

ここで営まれる暮らしには、こどももおとなも同じように五感を通して味わう豊かな時が流れる。この時を感じ、想像したことを自由に表現し、伝え合い認め合う喜びこそが、こどもにとってかけがえのない原体験になるであろう。

新設保育園の一年間を眺めてきた瓜生山が、今、耳をすませば、うふふと笑う声がこだまする。

付記:本文は、京都芸術大学こども芸術学科教授住岡英毅先生から「保育園のこどもの遊びをエッセイ風に書いてみませんか」との学科紀要投稿という学びの機会を頂戴した。開設一年目、自然と芸術を見つめて歩み始めた本園の実践記録として綴った随筆を「2019年度実践報告書」として掲載します。